

“農業の効率化”が強く叫ばれております。

植調協会がめざされている省力、省資源による水田除草剤体系是正と少量散布、畑作除草剤の剤型改良、あるいは水田転換畑の雑草防除等の開発目標は、まことに時宜を得たものであり、着々とめざましい成果を挙げられていることを聞き及び、農薬工業会といたしまして、心から敬意を表します。

植調協会には、これからも上記の課題と併せ

て、新しい植物調節剤の開発や、非農耕地除草剤の登録問題、あるいはさらに安全で経済性と生産性の高い新農薬の開発に、私共業界と手を携えて、ご努力いただきますようお願いいたしますと同時に、開発研究関係試験の効率化につきましても一層のご協力をお願いいたす次第でございます。

植調協会のますますのご発展を祈りまして、新年の挨拶といたします。

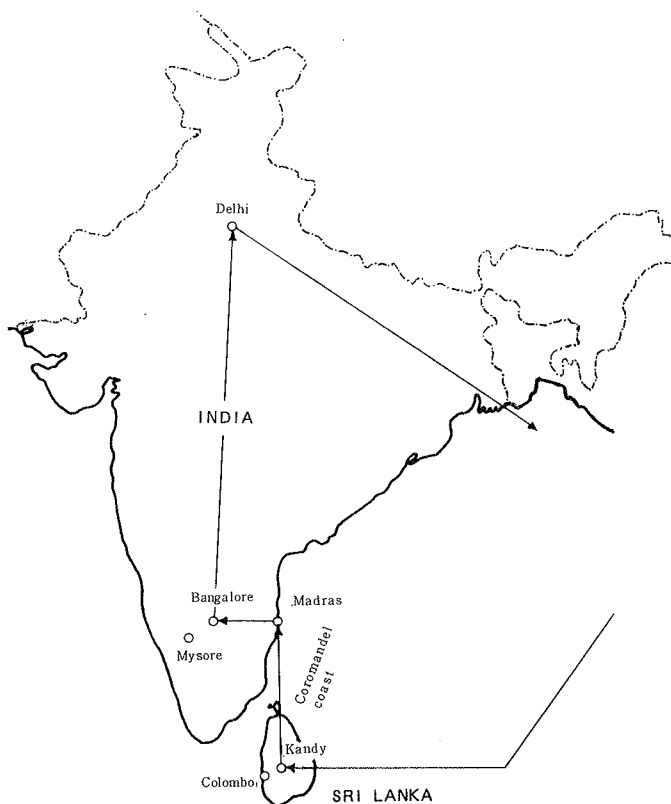
第8回アジア・太平洋地域 雑草学会議参加紀行

財団法人 日本植物調節剤研究協会研究所 鈴木照鷹・山崎和己

1. 旅行の日程

表記学会議が、第6回（インドネシア）、第7回（オーストラリア）に続いて、昨年11月に第8回学会議をインドで行なった。前例に従って、学会議出席と農業事情視察を兼ねて旅行団が編成され、一行29名が派遣された。その行程は図に示す通りであり、日程は別表の通りである。

すなわち、バンコックで2日間、海外旅行の足ならしをしてから、スリランカに入った。当初マドラス泊の予定はなかった。スリランカに3泊の予定であった。インドのローカル便は甚だ不確実であるという理由で、日程表の通り



インド旅行図

旅行日程表

(昭和56年)

11. 17 (火)	東京発 11:30 (JL-463) Bangkok 着 16:05
18 (水)	バンコック近郊農業視察
19 (木)	National Weed Science Institute 訪問. Bangkok 発 22:35 (UL-423) Colombo 着 23:50
20 (金)	Colombo 発 8:30 (専用バス) Kandy 着 12:30 農業事情視察. Central Agricultural Research Institute (CARI) 訪問. Royal Botanic Garden 見学.
21 (土)	Kandy 発 8:30 (専用バス) 製茶工場見学. 農業事情視察. Colombo 空港着 14:30 Colombo 発 16:30 (UL-121) Madras 着 17:40
22 (日)	Coromandel Indag Product (Ltd.) research center 見学. Madras 発 16:30 (IC-511) Bangalore 着 17:40
23 (月)	8th APWSS 会議出席.
24 (火)	〃
25 (水)	農業大学, 農業試験場, Alkali & Che- mical Crop of India (Ltd.) Scr- eening Station, マイソール方面農業事情 視察, 市内観光の各コースに任意参加.
26 (木)	8th APWSS 会議出席. 夜 親睦お別れパーティー.
27 (金)	8th APWSS 会議出席. Bangalore 発 19:50 (IC-404) Delhi 着 22:20
28 (土)	Indian Agricultural Research Institute (IARI) 訪問. Dr. R. Pras- ad から農場の案内を受ける.
29 (日)	Delhi 発 4:00 (JL-466) 東京 着 20:45

となったが、結果としては、インドの航空便は順調に経過した。

2. 今回の旅行の特長

この学会議は、例年11月頃に開催されると思っていたところ、第6回のインドネシアのときは暑いさかりだったのである。「インド」についてはいろいろのイメージがあるが「暑いでしょうね」という質問が第一である。この点は、11～12月が一番旅行によい季節といわれ、バン

コックを除けばまことに爽やかで、日本の秋分の頃を思わせた（標高の高いためでもある）。

「インド」について、「病気になるのではないか」、「食事が合わないのではないか」、「禁酒で楽しみが少ないのではないか」、「スローモーで予定が狂うのではないか」などの心配や注意があり、いろいろとハンディキャップが予想された。確かに学会議についてもスローモーで、ニュースが到達せず、講演要旨集も間に合わないのではないか、などとささやかれた。

そのため、少々のは目はつぶって、一同無事に予定通りに帰ってきた。この学会議は滞りなく運営され、要旨集もそろっていた。資料によれば、参加者は280名。そのうちインド在籍者170名。一般講演も103題のうち過半数の55題がインド自身の手によるものであった。インドが、総力をあげて準備をした様子がうかがわれる。

インドに強い人……こういう人がメンバーの中に2人含まれていたのが、旅の効果を著しく高めた……の話によれば、①インドは20年前に比べ、格段によくなっている。また、よくしようとする努力が認められる。②誰でも必ず腹はこわす。大腸の菌が入れかわるときに起こる（肝炎になるという話もよく聞くが、これは個人別



写真1 水路を埋め尽したホテイアオイ

(バンコック近郊所見)

の体質が関係するようである)。③ 貧しい人に同情するのはよいが、自動車の中で与えるように。言うまでもなく、われわれは一流のホテルに宿泊して、旅の安全を確保している。短期間の旅行でその国のすべてがわかろうはずはない。ただ、ホテルは快適であり、最近ひんびくと伝えられる先進国都市のホテルのような物騒なことは全くなかった。



写真2 2,4-Dの効かない広葉雑草
Sphenochlea zeylanica. Gaertn.
 キキョウ目 スフェノクレア科. スフェノクレア属: タイの名称は Pak Pawd という。
 (タイ National Weed Science Institute 所見)

なお、バンコックで夕立にあい、デリーで小雨にあったほかは、すべて晴であった。

3. バンコック滞在

タイについては、日本と国際交流も盛んであり、第6回のツアー参加者も帰途に寄っており、情報が豊富である。中山氏(第6回の調査団長)も報告(本誌11巻6号)している通りである。ただ、バンコックの野菜栽培地帯で、農薬を沢山使っている区域は徹収して北部の涼しい地域へ移動したようである。

バンコックでは、日本から派遣されている方にお世話になった。日本とタイの農協が合併で農薬製造法人をつくっている。ここで、販売・普及に従事している。また、日本の研究協力に



写真3 タンジェリンオレンジとバナナの混植試験農園
 タンジェリンオレンジを作付けて2年半、バナナは風を防ぎ、水系は作業路を兼ねている。
 (バンコック郊外所見)

よりできた研究所に、新たに「雑草研究計画」が開設され、現地研究者の指導にあたっている。これらの諸氏は、連絡をとりながら、熱意をもって職責に対処されており、今後のご活躍と成果とを切に期待したい。

バンコック滞在中の写真から、3葉を選んでみた。写真1のホテイアオイの利用については、日本でも研究されているが、タイではその利用先を日本に向けているようである。写真2の2,4-Dの効かない広葉雑草が、スフェノクレア科である(キキョウと類縁のため、キキョウ科の方が通りはよい)。写真3の農園は、規模が大きい。それで、はじめてできることであろう。

4. スリランカの印象

コロンボの街をはずれてしばらく車で行くと、美しい田園が開ける。スリランカの写真も3葉を選ぶ。写真4の植物園は、広く歴史もある。博物館や植物園は、学問の基礎であるが、史跡同様国の財産でもある。あまりに規模が大きいので、どこから撮っても1枚の絵に納まらない。その中を、副園長さんは勤務時間を超えて、さっそうと案内してくれた。

水田に執着が深いのは、このチームの特徴である。写真5のように、田植え中の現場に行きあわせた好運を、めいめいは車中からカメラに納めた。田植えの人々は、家族なのであろうか。部落の人々で



写真4 ロイヤル植物園(1371年創立)にはマホガニーの巨木をはじめ、すばらしい樹木が多かった(右下に人がいる)。(スリランカ キャンディ郊外)

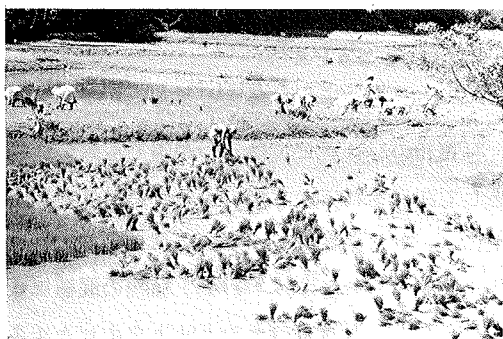


写真5 谷田の田植え風景
(コロomboからキャンディの沿道所見)

あろうか。どんな気持で田植えをしているのか、バスの客には関心がなかった。

写真6は解説の通りであるが、実は出発前に事務局から、一つの任務を託された。スリランカの中央農業研究所(CARI)と国際交流をしたい……というのである。CARIには、日本の若い研究者が派遣されており、その方々を通じて雑草とその防除の研究を今後いっそう推進してゆきたい……という意向が先方から示されたからである。そのために、当協会は、協会並

びにわが国の現状についての資料や日本雑草図鑑を、日本雑草学会は「雑草研究」のバックナンバーを贈った。後者については、予め別送し、席上確かにお送りしたのでその旨、ここに報告しておきたい。メッセージを書いたのは、事情を知らない日本からのメンバーに述べ、先方には贈る言葉を述べるためである。

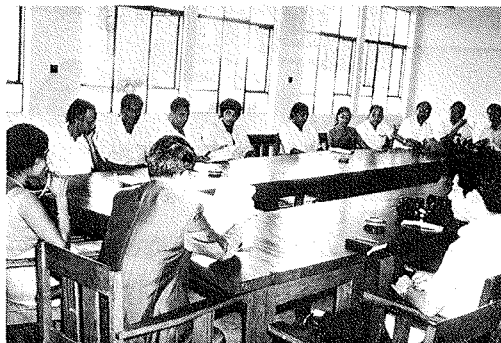


写真6 Central Agricultural Research Institute (CARI)において女性の所長にメッセージを送る筆者。
(ロイヤル植物園に隣接している研究所)

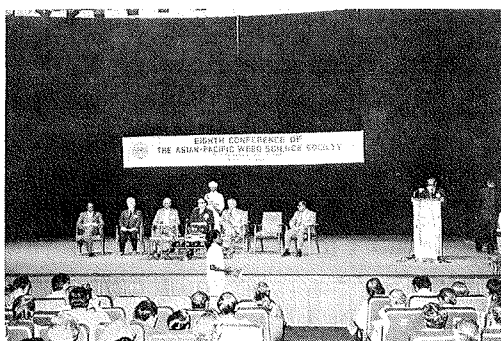


写真7 APWSSの第8回学会議の開会式

簡素なもので、会場の中に鳥が棲んでいた。
(インド バンガロール Chowdial Memorial Hallにて)

5. 8th APWSS 会議

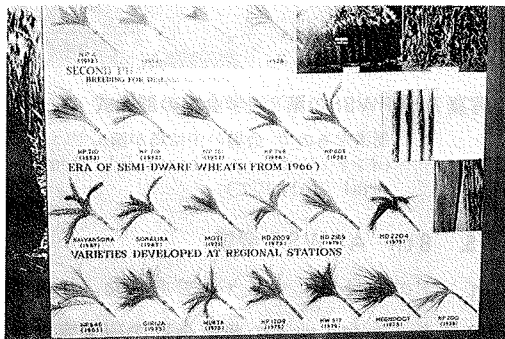
インドの初日は、マドラスであった。丁度日曜日であったが、地元の農薬会社の研究室と農場の案内は、歓迎のたれ幕を掲げ、leiを首にかけるとてなしを受け、少々思はゆかった。この会社も、学会議の昼食で招待の一端を担って

往復した。



写真7は、この学会議の開会式である。このHallへは、一般講演会場から、バスで輸送した。写真8は、Hallの外である。豆電球の飾り付けは、お好みのようで、個人の家の冠婚葬祭にも付け、ホテルの屋上にも飾りつけてあった。

一般講演会場は、West End Hotel、われわれの宿は Ashoka Hotel と離れていたが、メンバーは日がたつにつれて、オートリキシャ（2人乗りでタクシーの半値、外の風を一杯に入れて走るのは快適……と案内書に解説されている）を使って、2つの Hotel の間を

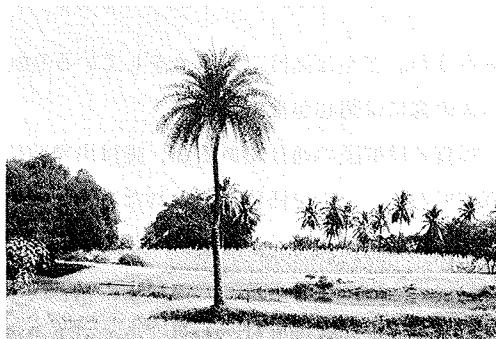


Indian Agricultural Research Institute
(IARI)の資料室より.
(ニューデリー郊外)



〔インドでは、栽培しているところをよく見た〕

写真10のシコクビエは、わが国でも飼料作物として注目されているが、インドではコメ・ムギについて栽培されている。シコクビエとキク科（ニガシードかベニバナ）植物の混植風景も見られた。写真11はヤシとサトウキビとイネの栽培が組み合わされている風景である。これ



(バンガロール～マイソール所見)

らの風景は、いずれもバンガロール～マイソールで見かけたものである。

写真12は、IARIで見かけた風景である。いまのわれわれには、驚くにたる風景である。小さな滑車で、雑草の芽だしをひっくり返してゆく。枯らすわけではない。その滑車を一人前の男が二人がかりで操っている。この写真から少し離れたところでは、サリーをまとった農婦が一人で静かに草を抜く姿があったが、いずれもIARIの作業員なのであろう。



写真12 悠々閑々たる人力除草
(写真9と同じIARIの農場所見)

この写真の遠景は、ヒマである。ヒマからは、エンジンの不凍潤滑油をつくっている。また、ベニバナ・ニガシード・カラシナ・アブラナ(皆黄色の花で一見区別が付きにくい)は、油の原料として栽培される。

マメ類の栽培も盛んである。ダイズよりも、chick peaを筆頭に、pigeon pea, cow pea, black gram, green gram, horse gram など、豆類の増産を進めている。調理が楽だというのが、その理由である。

広大なインドについて言えば、乾季・雨季があり、高地・平野があり、南部と北部があり、土壌型があって、農業も単純ではない。この点については、資料もあるので、その他の資料も含め、別個に解説してもらいたい。

7. 旅の思い出

われわれは、タイ、スリランカ、インドの旅をして、かつてわれわれの経験したような古さ、貧しさ、乏しさを見た。その反面、誠実さ、実直さも見た。外側からわれわれ自身を見直すよい機会にもなった。それだけに、いまのこの国で、日本の行なっているような農業とその被害防止対策が実行し得ないことも明らかである。今後、雑草の研究と雑草防除の技術が、着実に向上することを期待したい。

この学会議に、雑草のアレロパシーという項目があって、8つの講演すべてをインドが行なっている。アレロパシーとは、他感作用と訳し、特異の分泌物を出して、他の植物に影響を与えることをいうのであるが、熱心である。Parthenium hysterophorusなる雑草からpartheninなる物質を得て、その毒性を調べている。そして、根の生長抑制、発芽抑制の作用があると言っている。また、雑草の葉・茎・根の浸出液が、他の雑草の生育を抑制する……という。漢方薬の水浸出と同類であろうか。直接殺さない……という思想に通ずるのであろうか。

写真13には、中流(と思われる)の健康な少女群を掲げた。新しいインドを継ぐ人々になる



写真13 インドの少女
(マイソール所見)

であろう。ところで、写真14には、同年代の少しばかり異なった分類の少年群を掲げた。その解説は、写真につけた解説と、つぎの随想によってご了解いただきたい。



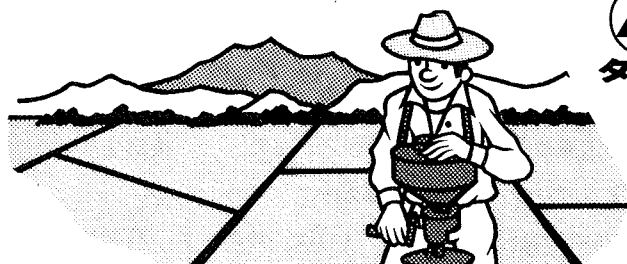
写真14 インディラガンジー首相の記念植樹
(1976にAshoka treeを植える)
のまわりで、英語で説明する裸足の
子供達
(バンガロールの公園にて)

「バンガロールの公園を歩いていると、小ばえ(裸足の子供達)が群がってくる。ボールペンをくれ……などというのである。“インドに強い”メンバーが、こういったのだそうだ。一人は案内をするように、一人は小ばえを追い払うように(そうすればほうびをやる)。すると、案内に立った一人は英語を駆使して、敏速果敢にメンバーを引き廻した。その見事さに、一同は公園を見るより、当人の挙動に目をうばわれ、あまつさえ写真を撮る始末。真のインドを見た思いがして、いたく感動したものである。」

なお、第9回 APWSS会議は、1983年11月28日から12月2日まで、フィリッピン(マニラ市フィリッピンプラザホテル)で開かれる予定である。

農薬は正しく使って、適正な保管管理をして下さい。

実力ある 水田中期除草剤



●水田の中期除草に アピロサンはスイス国、チバガイギー・リミテッドの登録商標

アピロサン®粒剤

●広範囲の水田雑草に効果がきわめて優れた、実力のある中期除草剤です。

●水田雑草の総合防除に

ワイダー®粒剤

●1年生雑草と多年生雑草を同時に防除できる、水田雑草の総合防除剤です。

*アピロサン粒剤・ワイダー粒剤ともに、低温時に使用しても薬害の心配がなく安全です。